「人間にはしてはならぬ事がある」

石本　興亜（昭和 14 年生まれ）

父と母と私と三人が夜の海に入っていきます。

当時私は 6 才、北朝鮮で生まれ育っていました。昭和 20 年 8 月、日本の敗戦と同時に、朝鮮は緯度 38 度線を境界に、戦勝国の手によりいとも簡単に南北に分断され、そこから悲劇の歴史が繰り返される事になります。

私が住んでいた黄海道（こうかいどう）の海州（かいしゅう）という町は大きな川の河口で海に面して位置する地方都市であったのです。

北の支配に進駐して来たソ連（現ロシア）軍は、南への脱出を図る多くの日本人の足停めを命じ、周辺の沿岸にも監視網をめぐらしている所でありました。

両親は日本内地への帰還の道は、その 38 度線脱出以外に無いという結論に至り、重大な覚悟をもってその実行に踏み切ったのです。

朝鮮の河川の多くが広い河口を持つ大川で、水に入ればそこはもう川よりも海の中という印象でした。この川名（かわな）は記憶にありませんが、世界でも有数な干満差を生じる海辺であり、父親は研究の末、この干満差を狙って向う岸へ川を渡ろうと決したのです。

真暗の海は進むにつれて深くなっていきます。闇を透かして見る対岸は、あまりにも遠く、私はまだ子供で泳ぎも知らず、次第に不安が増してきて、「もう帰ろう」と、親に何度も訴えた事を憶えています。親は「大丈夫だ、頑張れ」としか返事しません。

すると、遠い遠い彼方にポッと一点の灯が見えたと思うと、その光がみるみるうちに強く大きくなりこちらに近づいて来るのです。

これが監視翼から発せられたサーチライトであったと知るのはずっと後の事です。（当時は探照灯と呼ばれていた）

その光はグルッと広い海を舐め回す如く一巡して、サーッと奥に引込んでいきます。そのサーチライトが別の地点から又一条、さらに又別の角度から一条と数を増して、父がその都度「止まれ、動くな」と制止を掛けます。少し進んではライトに照らされて止まる。この繰返しの末、やっと向う岸にたどり着く事が出来ました。

この間、どれほどの時間が掛かったのか分かりません。最大首元まで水が迫ったと思いますが、よくぞ満ちてくる潮に巻き込まれずに済んだものです。逃げ得ずして、ここで一家三名の者、水中に没したかも知れません。

私としては何がどうなったのか、事態を理解する事も出来ず、ただ親に従って歩くのみ、歩くのみでありました。

実はここから南鮮京城（現ソウル）をめざした逃避行は始まっていきます。

民間の自警団が組織され、「保安隊」の目を逃れて昼は山林に身を隠し、夜間に行軍を重ねるという中で、もはやここまで、万事休すとの事態にも遭遇するが、そこに救い助けの手を伸べてくれたのは、寒村の名も無い村人たちでありました。私は彼等の心を忘れる事は出来ません。人間に敵味方があろう筈は無い。本来、人は皆助け合い、喜び合える仲良し仲間なのだ。今、私たちの年代はこの世から消え去らん

としていますが、後に続く若い人たちに向かって大きな声で叫びたい。

「人間にはしてはならぬ事がある。それが戦争だ」と。

（原文のまま掲載しています）